

『余地』

～相談業務を楽しむ方法 31～

<魔法の処方薬>

杉江 太郎

～情報の拡散～

私の職場は相談援助を行う公的機関である。様々な相談が寄せられ、様々な相談援助が展開されていく・・・はずである。

「・・・はずである」と歯切れ悪く書いたのは、社会の煽りを受けて相談援助機能が失われつつあるのではないかということを危惧しているからである。

この社会は、情報に溢れている。情報の拡散技術の向上により、誰でも簡単に情報にアクセスができ、誰でも拡散することが出来るようになった。その速度や量は格段に増している。

この業界だけではなく、どの業界であっても、大きな事件や事故などがあると、瞬く間に情報が拡散されていく。特に『加害-被害』の関係性が明確であったり、加害側を擁護する動き（責任を隠蔽するような動き）があったりすると、匿名の第三者は、まるで正義を振りかざすかのように、情報の拡散に躍起になり、組織やその組織に所属する個人の糾弾に繋がっていく。

私の業界でも、虐待による死亡事例等

があると、第三者の有識者により、関わっていた機関の対応について、検証されることになっている。子どもが死亡するという最悪の結果になってしまった以上、その対応の検証が求められ、2度と同じことが起きないように対応策を検討することは必要である。そうした動きは都度、メディアにて報道される。

そのことに先行する形で、匿名の第三者による SNS 等による拡散が行われることが多い。その拡散の目的は、対応を検討することではなく、組織や個人を責め立てることを目的にしているようにも感じてしまう。

こういった拡散は、援助職者にとって、不安を高めるきっかけとなってしまふ。遠く離れた地域の事象であっても、決して人事ではなくなってしまう、似たような家族を目にすると、途端に不安が高くなり、その援助者の中には、相談援助を展開するという選択ではなく、他機関にその解決を依頼するという選択をとってしまう場合がある。それは、一見すると、援助を展開することを放棄し、援助を別の機関に委ねることで自身の不安を解消

しているようにも見えてしまう。

本来であれば協力し合って援助を展開していくべきはずが、責任の所在を巡る押し付け合いが行われてしまうため、対立構造に陥ってしまう可能性がある。対立構造の中では、お互いが相談援助以外の部分に力を注ぐこととなり、得られるものも限られてしまっていることから、結果としてその従事者を疲弊させてしまう。

～組織の疲弊～

従事者が疲弊することで、組織を疲弊させることに繋がってしまう。その組織の心理的・安全性が失われることに繋がりが、その組織に所属している援助職者全体をも疲弊させてしまう。

私の職場においては、近年、虐待対応が中心となり、相談援助ではなく、介入的な関わりが求められるようになっていく。

他機関の援助職者からも介入的な関わりを求められることが増えているが、介入的な関わりには、一時保護や施設入所などの家庭から子どもを分離して処遇を検討するという方法が含まれており、その処遇を決定するに当たっては、家族や子どもへの直接的な影響が大きく、その決定は慎重にされるべきでもある。

ただ、死亡事例などがあり、その組織の関わりが明白で、介入的な立場を取っていないと、たちまちその情報が拡散さ

れ、責任を巡ってその組織が糾弾されることになる。

そのことは、まったく関与のなかった遠い地の組織の不安が高めてしまうことに繋がり、短絡的に「一時保護をした方が良いのではないか」という介入的な対応を求める風潮を強めてしまう。もちろん、子どもが今以上に、傷付かないように対応を検討しなければいけないが、それと並行して、もし介入するとしても、その後の影響や先の見通しについて検討しておかなければいけない。特に分離を伴う介入をする場合は、分離した後の再統合もセットで考えておかなければならないのである。介入さえすれば解決するというような、まるで『魔法の処方薬』な方法など存在しないのである。

～『魔法の処方薬』を求めた結果～

私の所属する組織は、『介入』だけをやる機関ではない。私が入るもっと前には、不登校の子どもらを集めてキャンプをしたり、琵琶湖1周サイクリングなどをしていたりしていたと聞く。非行の子ども通所や、家族療法なども盛んであったらしい。相談援助を担う公的機関として役割を果たしてきたように見える。決して、これは、昔が良かったと言いたいのではない。時代の変化とともに組織も柔軟に変わっていく必要があるだろうし、その時代にあった相談援助の形を模索していかなければならない。

ただ、虐待対応に人手が足りないからという理由で、国を挙げて組織の母体（人員）を増やしたり、介入が足りないという理由をもって、その組織の法的な権限を強化したり、保護者の厳罰化を進めるかのように、相談経過を全て警察と共有するようになったりと、まるで『魔法の処方薬』を与えているつもりにならなっているのではないかという、気持ちになってしまう。そのような対応を続けた結果、虐待の認知件数は増え、益々その対応に追われるようになり、どの組織も人員が定員以上に確保できなくなり、都会では人材の引き抜きが行われているという噂をもたらしている。

経験年数の低下により、組織全体が若返り、相談援助の役割を知らされないまま去っていく人もいる。組織全体の疲弊にも繋がっている。国がついにリクルートの課題に目を向けるようにもなっている。

このことは冒頭に書いた、相談援助機能が失われつつあるのではないかという私の懸念にも繋がっていく。

～『魔法の処方薬』はない～

この業界に『魔法の処方薬』はないと断言する。では、解決に向けて、どうすればいいのか。そもそも解決など出来るのであろうか。

どの時代もそうであったように、目の前の家族や子どもに対して、何が出来る

のか、何なら出来ないのかを常に模索し続け、常に最善の選択をし続けるだけである。

最善の選択をし続けるためには、無知であってはいけない。その家族を知ろうとし、その子どもを知ろうとしなければならぬ。その家族やその子どもが所属する集団、その家族やその子どもに関わっている組織のことを知ろうとしなければいけない。常に全体に興味を持ち、物事を『加害-被害』のように『原因-結果』だけで分断せずに全体を俯瞰して見る必要がある。

援助職者の中には、怒りを前面に押し出して、自己の主張してくるように見える人もいる。見ると書いたのは、その人のことを『怒りを前面に押し出してくる人』と捉えてしまうとそれ以上、対話が進まなくなってしまうと思うからである。もしかしたら疲弊する組織に属しており、守られていない人なのかもしれない。もしかしたら組織が『魔法の処方薬』を探し求めており、巻き込まれているのかもしれない。自身にも余裕がないと出来ないのかもしれないが、相手に興味を持ち、状況を知ろうとすることで、組織全体や個人の理解に繋がるかもしれない。

常に模索し、次の一手を考え続ける。その先にどのような未来があるかは誰にもわからない。うまくいくか、うまくいかないかの保障はない。無責任かもしれないが、誰にも責任は取れないものであ

る。もがいて、苦しんで、少しの変化も見逃さない。

益々、介入的な対応が求められる組織ではあるが、相談機能を衰退させないように、もがき続けたいと考えている。『魔法の処方薬』を疑っていきたい。